**研究発表要旨**

**マードックにおける日本的小道具
　― 根付を中心として ―**

**大道　千穂**

　マードックはその生涯に三度も日本を訪れた親日家であり、オックスフォードの自宅にも多岐にわたる日本関連の書籍を所蔵していた。日本に関して深い関心を抱いていたマードックが小説内に日本のモチーフを描くとき、彼女はそれらにどのような役割を期待したのだろうか。本発表では数ある日本のモチーフの中でもとりわけ根付に注目し、マードック作品における日本の小道具の役割を考察した。

　マードックが作品に初めて根付を登場させた『魅惑者から逃れて』（1956年）には根付の詳細な描写があり、ここからはマードックの根付に関するきわめて正確な知識を伺い知ることができる。根付はこの小説において謎めいた主要登場人物、ミーシャのコレクションとして登場する。動物や女性をその魅力/魔力で思うがままに支配する支配者としての自分自身を確認するかのように、彼はネズミ捕りとネズミ、海女と魚といった、動物を支配する人間を彫った図柄を愛する。根付は誰もが愛さずにはいられないけれども同時に悪魔的であり、東洋的であるとされるミーシャその人のように美しく、そして不気味に描かれている。

　『哲学者の弟子』（1983年）においては根付は複数の主要登場人物の心を捉えるモチーフとして描かれ、強い存在感を放っている。本作において根付は『魅惑者から逃れて』同様、その所有者であるステラの魅力と神秘性を強調している他、さらに重要なことには正体不明の語り手Ｎに魔力を貸す役割を担っている。自らを「影」と呼び、物語の表面に現れることを拒むＮが、物語中で一度だけ、十九世紀的な全治の語り手であるかのような客観的な姿勢を崩し、物語の中心へと躍り出て自ら登場人物と会話をする場面がある。それが根付に言及する場面なのだ。それまで透明な存在であった語り手が突然に声と肉体を持った一人の人間として読者の前に立ち現れるこの場面は、語り手が神秘的な、あるいは魔術的な肉体を手に入れた場面と解釈できる。Ｎはステラのコレクションを「僕の懐かしい友達」と呼び、中でも「デモンが卵から出てくるところを彫ったやつが特に好きだ」と述べたが、ここで卵を割って出てきたデモンは根付であると同時にＮその人なのである。

　Ｎが言及している根付はおそらく烏天狗が卵から孵るところを彫り上げた江戸市民に人気の高かった図柄のことである。「またとない好機を得る」という意味を持つとされたこの根付の力を借りたかのように、Ｎは物語るという「またとない機会を得」て、静かに、しかし確実に、町のすべてにパワーを行使したのである。町全体をN's Town と名付けて我が物としたうえで物語を紡ぐＮは、小説中において最も目立たない存在ながら、実は最も強大な力を持って町を支配している人間といえる。

　江戸市民にとって根付はきせるや印籠を携帯する実用的道具であったと同時に日々の幸運を祈るお守りであった。小説家としてマードックはキリスト教の非神話化の可能性、すなわちキリスト教が超自然的な神話から自らを解き放ち、現代人にとって信じることのできるかたちに変容することによって現代人の生活の中に宗教を回復させることはできないだろうかというテーマを模索し続けた。日常生活の中に溶け込んだ異国の小さな魔術である根付は、そのような彼女にひとつの重要なヒントを与えたのではないだろうか。『魅惑者から逃れて』や『哲学者の弟子』はこのことを強く印象付ける。

　しかしながら、最終作『ジャクソンのジレンマ』（1995）においては、根付は登場はするもののきわめて表層的にしか扱われておらず、物語全体への影響力もほとんどない。それはなぜなのか。作家は自分がよく知らないことについて小説に書くべきではないと明言していたマードックにとって、根付は魅力的ではあり続けたが、徐々に小説の鍵を握るモチーフではなくなったのではないだろうか。晩年のマードックが、根付に象徴的意味を持たせずして同じテーマの小説を書いたとすれば、それはマードックの作家としての円熟を意味するのである。